せたかむい
発行・古平町史編さん室
文化会館 ☎42-2590
第208号・平成19・1・1

年表で読む古平の歴史

［113］

林業

◆林産業の育成

特に明治以来のニシン漁業などによって荒廃した山林を復興するために、古平町内でも植林を盛んに進めてきた成果が現れ、昭和期に入るとカラマツ林は次第に伐採の時期に入ってきた。

これらの森林はニシン好景気の時代に植林されたもので、現在（昭和初期）のような不況の時代になると、価格は低迷しているもののその経済的効果は甚だ大きいものがあった。

しかし、中には少しでも金に替えたいと乱伐に走る者もいたが、木材価格の下がったことから植林には余り積極的ではないようだった。

町では従来のカラマツに代わって植林の改善を図るために、価格も高目で需要の多いトドマツなどを奨励した結果、トドマツを植林する者が多くなった。

昭和九年、古平町は後志支庁からトドマツ五万本余りの無償交付を受け、これを希望者に配布した。

また、他町村ではすでにつくられていた造林実行組合を昭和一〇年、古平町造林実行組合として設立し、林業会後志支会からの助成金を受けた。

町でも継続して植林についての講習会なども開催し、その他の樹種についても植樹の奨励や援助を行なった。

道でも植林の状況を検分するため昭和八年、羽生拓殖部長・札幌営林区署長渡辺兵左衛門らが来町し、古平町から余別村方面までを視察したが、これには古平町長や美国町長らも随行した。昭和一〇年にも札幌営林区署長らの視察があった。

同年、古平町の植樹翁とも言われていた高野平治が、皇太子殿下の生誕を祝って松苗千本ほどを購入し、自分の所有する山地に植林したほか、学校などにも記念として苗木を寄贈した。

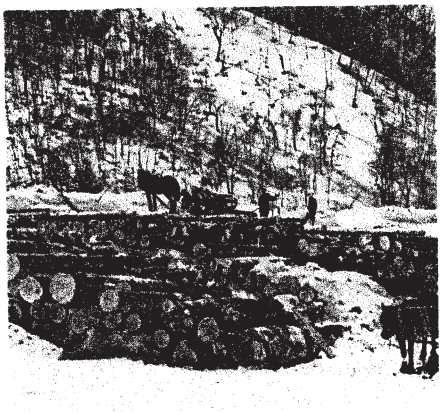
また、養蚕は本州方面では盛んであったが、大正時代からは古平町でも農家を中心にして養蚕が行なわれるようになり、一般家庭でもこれを行なうところも出てきたことから、町では養蚕をしている業者や家庭にクワ（桑）の苗木を無償配付した。

◆森林保護と防火

一般の民有林に植林されたカラマツ林は次第に広がり、中にはそれが民家の近くにまで及ぶようになり、もし山火事でも発生したら民家が危険になる、と警告する者も出る程造林された。

植林が盛んになるにつれて山火事の発生も増え、被害も拡大する傾向にあった。

このため全道各地に森林火災予防組合ができ、古平町でも昭和六年に、森林愛護と防火を目的として古平愛林組合が設立され、ハイカラ山の林地で発会式が行なわれた。また、森林火災の予防を宣伝するため、格安の料金で小学生を対象にして活動写真（映画）観覧も行なわれた。



← 古平の冬山造材の現場

◆町内で記念植樹

昭和一四年、泥の木青年団では鴨居木分教場にロックガーデンを造成し、中野雅栄が高山植物などを寄贈した。

また、同青年団がドロノキ相当数を植栽したというが、場所など詳しいことは不明である。

昭和一五年、紀元二千六百年（日本の皇紀）記念として全国的に記念植樹が行なわれたが、古平町でも町有地や学校、神社などに標識を立て記念植樹を行なった。

◆戦時中の木材利用

昭和一二年、日支事変（後に太平洋戦争と呼称）が起きるとカラマツは坑木として大量に強制的に伐採され、法律によって統制品となり、ほとんどが町外に移出され幼令樹だけを残して終戦となった。

戦後、町内のカラマツの多くは余市町の木材業者によって、各炭鉱（坑木として販売されていた。

木材業者は登録制となり、古平町では桐沢定吉が登録業者となり、後には田仲国松も登録業者として坑木を稲倉石鉱山に納入していた。

昭和一九年、戦時下という時代の要請を受けて古平町森林組合が設立され、これには町村長が組合長として就任した。

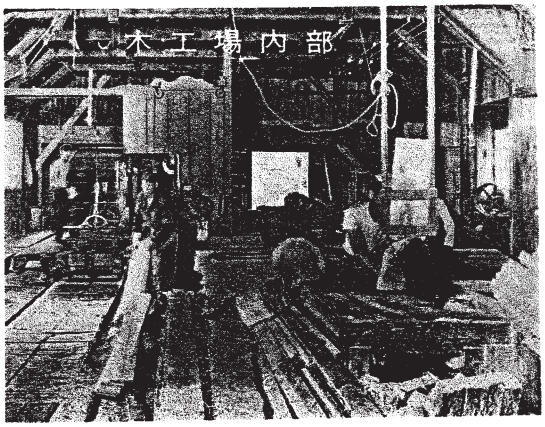
戦後になってもそれが続いたが昭和二七年に組織を変更し、さらに昭和四二年には余市町森林組合と合併した。

◆物資不足の時代

昭和二一年、戦後の物資不足は厳しく、伐採に使う鋸（のこ）の目立て用のやすりにも事欠く状態であった。ようやく森林組合にも目立て用のやすりが割り当てで入荷し、組合員に配給されるという状況であった。

町内では早くから中 中村木工場が営業し、戦後間もなく相良木工場も新設されたが、湯内（現豊浜）鉱山に坑木を納入していた。

ところが昭和二四年五月、古平町西部方面の大火があり、木材の需要が急増したことから同二五年、浜通りに伊藤木工場が新設した。



← 中 中村木工場の作業風景

◆国土緑化運動

昭和二六年、日米講和条約が締結されるとそれを記念して、国土緑化推進委員会により全国的に講和記念植樹運動が展開された。

古平町でも、町の環境美化を図り今後の植樹運動を推進することを目的として、山林だけではなく街路樹や河岸、海岸、広場など（への植樹を、団体や一般家庭に呼びかけ苗木を安く斡旋した。

また、町役場職員の手によって、古平川河畔に吉野桜二〇本余れが植えられた。

昭和二五年、古平町立学校の学校林を造成する条例がつくられ、収益は町の収入とするが造成した学校の経費に当てることとされた。

↑ 王子木材のチップ工場（昭和47年）

× × ×

昭和一五年頃から戦争の激化により、次第にほかの物資と共に燃料事情も悪化し、古平町でもチョペタンの沢などで町営の木炭製造を始めたが省略

〈この項　終り〉

高野名寺作さんの日記から
当時の世相を見る
〈120〉

大正十四年 ～続き

▼九月一日

今日は祝聖会例会日、四時半起床、早速出かける。かなり早かったと思ったが四人目であった。読経の後、和尚の部屋で話し六時半帰る。今日は二一日の厄日だが至極平穏で晴天だ。思い起こせば一二年の今日は、東都大地震の大惨事の記念日だ。当時の惨状は実に気の毒なことだ。今日から一週間は勤倹週間だ。夜、種田さんの家で謡いの稽古があるとて誘われ聞きに行く。一〇時帰る。

▼九月二日

起床六時、天気快晴、今日は観音滝祭り当日だ。七時頃から参拝の善男善女が三、四人から七、八人と連れ立って絶え間なく行く。天気がよいので人出も多い。私も九時半、自転車で出かけた。泥の木熊野神社の祭礼もあり賑やかだ。一〇時半着いたが大勢が来ている。一一時読経が始まる。一二時に終り、思い思いに昼食をとる者、酒をやる者、店も出ていて賑やかだ。岩の上に登る者や滝に打たれる者、中には泳ぐ者もいて、それぞれ楽しんでいる。一時頃から盆踊りを始める一団もあれば、安来節、追分、その他、芸を尽くしてなかなか面白い。三時頃までにボツボツ帰る。賽銭一三円余り、志納金四四円余りあったとのこと。自転車で帰ったのは四時頃だ。天気で好都合であったがずいぶん疲れた。旧十五夜の満月が光り輝いている。涼風に満月、秋らしくなった。

▼九月三日

起床七時、曇り空で時々小雨が降る。沖風が吹いて海はシケ、戸外で単衣を着ていると寒い、袷が欲しい。早秋である。先日までは暑い暑いと言っていたのも束の間、これからは一日増しに日が短く寒くなる。イカ漁は一〇〇～二〇〇ぐらいとれたとのこと。この頃は子供らが学校へ行くと家の中もずいぶんと静かになる。三時頃農園行き、父と悦三はアジウリを食べたり、リンゴ拾いをしている。14号は良い味になった。私は金さん、甚内さんの畑を見て回る。畑のいろいろな花がきれいに咲いている。ネギの草取りをし、アジウリをもいで六時頃帰る。

▼九月四日

起床六時半、朝夕の涼しさは急に秋らしくなった。先日、樺太旅行中はずいぶん暑かったが、北海道も暑い盛りはわずかだ。樺太旅行は今思い出しても楽しく愉快であった。樽新へ北山画伯が「樺太周遊の印象」と題して、もう一四、五回も出している。毎日、新聞を見ては当時のことを思い出して楽しい。イカ漁、昨夜はシケで休む。涼風が心地よく吹くので、二階に細引きを張り衣類の虫干しをやる。私は一一時に早く昼食をし農園へ行く。日中はシャツ一枚で仕事をしていてちょうどよい。花畑から板倉の前まで草取りをする。五時頃、父と悦三、トミらが来てスイカ、リンゴなどを食べて喜んでいる。六時に終って帰る。よい運動になった。

▼九月五日

起床七時、朝夕の涼しさは初秋だ。気持ちよく働けて左程疲れない。一年中こんな気候ならよいが。熊さんは早くから農園行き。イカ道具の客があり、九時過ぎ農園へ行く。ワラジがけで、花畑からグスベリ畑、リンゴ苗木畑の草取りをして昼食となる。大きな弁当箱に魚、一日干したイカ、ナスのお菜だが、水を飲みながら食べるのも、働いた後はどんな料理よりもおいしい。働いて食べるのは何よりの薬だ。イチゴ畑にするところを選定

→観音滝霊場として観音像をまつり多くの人の信仰を得ていた。

する。スイカ、アジウリを食べ、五時帰る。久し振りでたらい湯に入り心地よいが少し寒くなった。蚊やノミなどはぐんと少なくなった。

▼九月六日

昨夜、禅源寺執事が来て、丸山観音堂の敷地が決定し、二六日、奉安式をやるというのでビラを書くのを依頼される。起床七時、妻は今日、困、越中屋連と観音滝へ行くというので、オハギやご馳走を支度するべく、五時頃から起きて一生懸命だ。曇天だが雨模様でもないので、山遊びにはおあつらい向きだ。一行二〇名ほど、大騒ぎで支度し、ワラジ、ぞうりに思い思いのご馳走を持って出かけた。さぞ楽しみなことならん。今朝はイカ大漁、三〇〇～五〇〇とれたとのこと。イカ道具もこまごまと売れて行く。カムチャッカへの出稼人もポツポツ帰って来る。今年は大不漁で、漁夫も会社も思わしくないとのこと。殊に会社は大損害なりと。

▼九月七日

起床七時、この頃で一番の暑さだ。イカは今朝も大漁、三〇〇～一、〇〇〇ぐらいとったとのこと。熊さんは今夜、由の船に乗せてもらいイカつけに行くとて支度をしている。二時頃出かけた。大漁でありたいものだ。14号リンゴを買う客が来て、農園へもぐに行く。リンゴの番が誰もいないので、カラスが二、三〇羽も集まり、14号、旭、トウキビなどが荒らされた。鉄砲を撃ってようやく退散した。三〇斤余りも取られた。少しも油断ならぬ。午後四時頃帰る。勇丸で岡崎へ14号送った。夜はムシ暑い。天気模様が悪くなり、沖のイカ船は朝までに戻るのかどうか。夜、司金物店の三歳の子供が死亡し通夜に行く、可哀想なことだ。九時帰る。

▼九月八日

起床七時、熊さんは昨夜、初めてイカ漁に出たが空模様も悪く、もしや時化にでもなればと心配していたが、天気も保たれ七時半帰る。一五〇ぱいもつけて来る。イカは大型だ。近所へ配り、家でも食べたほか六〇ほど干した。九時頃から暴風になる。時に雨を交えて荒れ模様。二百十日の前後でいつ時化になるかも知れず、沖合いには汽船三隻が避難している。昨日のムシ暑さはなく今日は涼しい。午後二次頃、熊さんと妻はカラスと大風でリンゴが落ちるのでリンゴもぎに行き、一〇〇斤ほどもいで来る。イカ漁は休む。夜、妻はヨの通夜に行く。

▼九月九日

起床七時、天気快晴だが海は昨日から波がある。イカ漁があるのでイカ道具は少しずつ売れている。昨日からの風でリンゴが落ち、妻は畑へ行く。熊さんはイカつけで由へ行く。まだ波が少しあるようだが出漁した。夜、東京へ行っていた林さんが来て、いろいろと東京の話しをする。多額議員選挙もいよいよ明日だ。美国二名、岩内の一名は失格、古平の六名は田舎としては珍しい多い数だ。室蘭でさえ二名ぐらいしかいない。

▼九月一〇日

秋空高く、灯火親しむべき候となった。熊さん、八時頃イカ漁から帰る。ナギになり一〇〇余りとって来たが皆大型ばかりだ。好天気を幸い裏に干す。涼風に当ってイカも真っ白くきれいだ。妻はリンゴ買いの客が来たので、父と農園へ行く。熊さんが沖へ行くのでカラスに困るとのこと。熊さんは二時頃出かける、今夜は上ナギなので明日はよい漁あるだろう。今夜平へ遊びに行く。林さん、高太郎さんもいていろいろ時事を話し、一一時半帰る。弦月高く澄みわたり寒いこと、外套が欲しいようだ。

▼九月一一日

秋空高く心地よい時だ。熊さん、イカ漁は不漁で二〇ぱいほどだ。店は閑散、妻は午後から、リンゴの袋外しやらササギもぎなどやると言って、四郎、悦三を連れて行く。父は友達と浜へガゼとりに行った。寒くなって来たのになかなか元気がある。一日増しに寒く、今日は単衣では寒くセルでちょうどよい。三保丸でアバ縄二〇個が着く。

▼九月一二日

起床七時、曇り空で小雨が降り出す。久し振りに銀行行く、今、大謀などで用足しをした後平に寄りしばらく話す。今井さんに寄り五時頃帰る。大阪のおじさんに14号を小包で送る。多額議員選挙本日開票、樽新号外で見る。当選・金子元三郎＝六一票、高橋正治＝五一票、次点小熊＝三七票、小樽二名が当選し大勝利だ。

▼九月一三日

起床七時、天気快晴、今日は祝聖会の観音滝へ参拝する日であったが、

朝から衛生掃除にかかったので私は見合わせた。春より幾分省略してやったが夕方までかかって終ったが、これで清々した。ムシ暑く再び夏がやってきたようだ。熊さんのとって来たイカ、一日目は風もよく仕上がりも良かったが、二日目は雨模様だったのか赤くなった。今日の天気でよく干せてくれたらいい。夜、㊀で部落会常会があり行く。来る一九、二〇日の恵比須神社祭礼につきいろいろ協議する。

▼九月一四日

起床七時、朝五時頃から曇り空がだんだん暗くなり、六時頃から大雨になった。雷鳴が激しく、子供らは蚊帳の中で、ヘソを取られると恐ろしがっていた。大雨も九時頃には青空を見せ始め、上天気になった。木材会社では、学校建築の木材運搬について、ナギ模様を問い合わせたとか。熊さんと妻は、午後から悪路の中農園へリンゴもぎにいく。トウキビ、スイカももいで来て沢山食べた。

▼九月一五日

今日は祝聖会例会日、起床四時、洗面早々に出かけた。五人目であった、割合皆早い。家内中特に大病にかかった者もなく、子供らも別段変わりなく、四郎、悦三、ナツもまだ守りが必要だがけがもなく、これはひとえに神仏の加護と感謝せねばならぬ。14号の時期なので観音さんに手向け、のち和尚の部屋で一同にも分ける。涼風が吹き心地よい。帰ったのは七時、朝食後、妻は㊁おっかさん、八ねえさん、㊂の女中さんらとキノコ採りに行く。なかなか元気だ。今朝、イカ二〇〇～三〇〇とれたというので、少し活気づく。妻らは五時頃沢山採って帰る。夜、大鶴間へ行き話し、一二時帰る。

▼九月一六日

起床七時、朝から曇天、九時頃から雨が降り出す。イカ漁多きは三〇〇、以下五〇ぱいまで。カニ縄がポツポツ売れる。熊さんは袋はずしに行ったが雨で一度戻り、また草刈に行く。14号も大体終り、旭は一日増しに色づく。夕方、中村床屋で散髪する。八時頃 平へ行き、いろいろ話して一〇時帰る。朝夕は寒くなってきた。北海道庁長官依願免官となり、中川健蔵（熊本県知事）が任命された。

▼九月一七日

起床六時、この頃では早起きだ。朝食後、父と吉治の散髪をしてやる。これで四〇銭ういた。今朝はイカ二〇〇ぐらいとれた。快晴の天気も九時頃から急に大雨、ドシャ降りになった。町では衛生掃除のところやら、イカ干し、キノコ採りに行ってた人達はズブぬれで帰る。大雨も一一時頃にはからりと晴れて、一天雲なき秋空になった。向かいの電気会社へロシヤ人で、ラシヤ服や布地売りが来たので見に行く。冬服が一着欲しいと思っていたが、意外に安いので佐々木君と一着づつ買う、三〇円だ。これで夏、秋、冬とひと通り揃ったからよい。四時頃、悦三と農園へ行く、五、六日見ないうちにスイカ、アジウリが畑にゴロゴロしている。トウキビ、スイカをもぎ、落ちリンゴを拾って帰る。

▼九月一八日

昨夜、㊂のおじさんと、早起きして散歩するべく打ち合せをしていたので、四時四〇分に起床した。まだ薄暗い。早速㊂へ行く。五時に二人で出かけたが寒いこと。セルの単衣と半天、たびで海岸へ出る。イカ船はまだ来ぬ。沖には大謀の型入れで、発動機船が二隻で引き船をして勢いよく走っている。川崎船二隻が満帆で小樽方面から入港して来る。ナギている秋の海、その中を帆に風を受けて走るのを見るのも楽しい。川端の風は冷たい、二つ目のアナ（沖村海岸のトンネル）のところまで行く。沢江を通る時、東の空を真っ赤にして日のでの景色がよい。帰ったのは六時、よい運動であった。朝食後、恵比須神社へ行く。世話役連が集まり、明日の祭りの準備をする。九時に帰り、この好天気に農園へ行き、アズキもぎをやる。

一八日午前三時頃、帝国衆議院・貴族院議事堂から出火焼失、損害五百萬円

▼九月一九日

起床七時、朝から雨に風を交え海は時化だ。辻に立っている恵比須神社祭りののぼりや旗も、重く垂れ下がっているところもある。今日は学校で八時から古平・美国・積丹三郡連合教育研究会があるとの通知があり、梅野君と参観に行く。一時間目は国語、二時間目は算術で、各学年を一巡する。われわれの小学校時代とくらべて、教授の方法が進歩していることがわかる。その後、高等科二年の公開授業を見

る。一一時から運動場に五〇名余りの教員集まって賀疑がある。正午に帰る。午後から天気も晴れたので、恵比須神社のお祭りをやることになり手伝いに行く。準備に忙しい。六時、三山神社の神主さんが来てご祈祷をし、七時半終る。その後、泥の木豊年踊りと、入船町の人達の盆踊りが金子干場であり賑やかであった。

← 三山神社の祈祷札

▼九月二〇日

起床六時、今日は恵比須神社祭礼当日だ。余市から来ている浅上さんを宿に訪問するべく、自転車にリンゴを積んで行き、三〇分ほど話しで帰る。朝食をすませ、九時神社へ行く。幸い秋空の好天気になった。九時神輿が出発する。行列も賑やかだ。一条、二条通りから中央通りを通ったが、あちこちで酒肴が出る。二時半、ようやく泥の木着、私は去る猿田彦のお供したのでなかなか忙しい。泥の木では赤飯を馳走され、三時帰途につく。泥の木豊年踊りが後に続いたので、山車以上の人出だ。七時半無事に帰着。この夜も豊年踊りと、入船町の盆踊りが金子干場でやる。櫓をこしらえ大電球をつけて実に賑やか。私も踊りを見て一一時までいる。なかなか面白かった。

▼九月二一日

昨日の祭りはずいぶん賑やかであった。疲れた割りとはやく七時に起床する。曇り空で時々雨が降る。昨日なら困ったが、今日の雨は幸いだ。帳簿などを調べ、九時、恵比須神社へ手伝いに行く。二〇人余りが集まり、後片付けに忙しい。供物の処分、借物、道具の始末、会計などいろいろな用向きがあり、私は会計の手伝いをする。昼食は、一同で供物の漁菜でイッパイやり慰労する。二時から原田さんと各商店の支払いに歩く。七時ようやく終る。何やかにやで予算以上にかかる。どこの家へ行っても今年の祭りは賑やかで、四〇年からの元老でも、こんな賑やかな祭りは未曾有のことだと言っている。これも協力一致の賜物だ。

▼九月二二日

起床六時、朝夕の涼しさ気持ちよい。蚊帳もすだれもいらなくなった。先日、たらい行水をやったが、この頃ではもう寒い。昨夜、司老婆腹痛で心配したとのこと。早速、今朝九時頃見舞いに行く。だんだん落ちついて良くなったとのこと。銀行、力三郎、金、その他に寄り一一時帰る。晴れたと思っていたら、また急に降り出した。秋空は天候が定まらない。午後一時頃、原田さんと昨日の残り分の支払いに歩き三時帰る。恵比須神社のお祭りは実に賑やかであったと大評判だ。

▼九月二三日

起床七時、朝夕の零期もなかなかだ。今日は彼岸の中日、お寺では早くから鐘がゴーン、ゴーンと鳴っている。正午、妻は寺参りに行く。熊さんは農園行き、この晴れなので仕事はある。私は帳簿整理などやる。午後から原田さんと恵比須神社の会計帳簿を整理する。今日は近頃で一番の好天気であった。イカ漁も左程なく、五〇～六〇どまり、多くて一〇〇ぐらいだ。一枝さん行きの衣類四個、勇丸に積み込んだ。

▼九月二四日

起床六時、まだ電気がついている。洗面早々浜辺を散歩する。イカ漁船は沖から帆をかけているのが見える。沢江の橋まで行く。秋の川辺は殊に水がきれいで景色もよい。子供らは小さいタコを揚げて喜んでいる。自分らもこんな無邪気な楽しい時代もあったのだ。浜辺では電気会社の平さんが、ウグイを釣っていた。静かできれいな海、朝早く新鮮な空気は何よりも薬だ。末政の弟さんの家では、カツオを買ってカツオ節を作っている。ソバだしに千本以上も使うとのこと。妻はキノコ採りに行き、熊さんは農園行き、私は九時から役場行き。国勢調査準備につき、いろいろと注意があり、必要品を渡される。記念品として万年筆一本、皮かばん一個をいただく。一五、六円の値がある立派なものだ。よい記念になる。熱心に責任を果さねばならぬ。夕方、農園まで散歩する。七日の月が中天に輝き、星が沢山出てよい夜だ。明日は晴天ならん。

▼九月二五日

起床六時、洗面後、海岸を散歩する。㊐おじさん、㊌さんと同道する。沢江の橋まで行く。朝の景色はよい。帰って朝食後新聞を見

る。熊さんと天野さんは袋はずしに行く。妻とソノさんはアズキもぎをやる。私は九時から国勢調査の準備調査で歩く。旭部落方面の受け持ち、美登利支店のところから中央通りの左側を回り、東大通りに出て昼食、一時半からまた歩く。戸数八八戸、概数三六〇名だ。今日はこの頃で一番の暑さだ。夜、畑からとって来たスイカを食べたが、赤くよく熟しておいしかった。夜に入って雷鳴、雷光があったが雨は少なかった。明日の丸山観音奉安式の天気は如何。

▼九月二六日

起床六時、川端まで散歩する。今日は観音奉安式当日、幸い快晴だ。私は八時半、礼服で出かける。だんだん人も集まり、一一時、ようやく禅源寺を出発する。行列は三町も続く。妻、悦三もお供する、旗、花などで行列も賑やかだ。正午、新地上の敷地に着く。古平湾内から遠く沢江、歌棄ほうめんも見える、西は群来村から海上を一望でき、見晴らしのよい高地だ。ここを地均しし手入れをすれば、実に立派な公園にになる。泥の木観音と共に好一対の古平名所だ。時々小雨が降るので、新地分教場で休み昼食する。人出もずいぶん多く、道路ぶちには掛け茶屋なども出ている。一時から読経が始り、二時頃に終って随意に散会する。帰途、竪月、ヨ|などに寄り四時過ぎ帰る。後、国勢調査の世帯番号張りに出る。八時頃まで歩き、なかなか忙しい。

▼九月二七日

起床六時、天高く馬肥ゆるの好季節、山遊びなどにはよい時期だ。妻は 仆ねえさんとキノコ採りに行く。私は国勢調査に八時から出かける。世帯番号札を張り、申告書を配布する。珍しくよい天気になったのでイモ掘り、アズキもぎなどで不在の家が二〇軒もあった。一二時までに終る。午後から月末の帳簿調べ、夜は目録書きをする。一〇月の月、秋空に高く澄み渡ってよい夜だ。入船町 ㊕ 大謀で大漁、マグロ五〇余本も揚がり大景気だ。東京ではコレラのため値段が安く、一本五〇円ぐらいとか。それでも二、五〇〇円余りの水揚げだ。

〈続く〉

父の思い出

高野名　正治

父『幸作の日記』も日の目をみて、皆様に愛読され心から嬉しく感謝しております。

八人の子供の思い出はたくさんありますが、「穴倉」と「浜辺」のことについて述べてみたいと思います。

私の店に接続する「石倉」は、明治三十八年（約百年前）に水見大工さんにより建てられ、入り口のドアは木・土・石・の三枚の戸で開けるようになっており、また、石倉の中には深さ一・五メートル程の地下室があり、「穴倉」と呼んでいて板でふたをしていました。

兄弟がケンカやなにか悪いことをしたりすると、父も堪忍袋の尾をきってか、

「引っ抱えて穴倉だァ！」

と言って真っ暗な地下室へ入れ、木のふたをして上に米袋をのせるので出られなくなり、泣き叫んだものでした。

しばらくすると、熊さんなどが、

「もう出してやらんか」

と言って出してくれ、その怖かったことは今でも忘れられません。

「浜辺」の大好きな父は、

「はまサ いっかい」

と言っては、幼い子供達の手を引き、二百メートル程前の ㊀ の浜辺でよく遊びました。

当時は砂や石の浜が遠く続き、浜辺から漁船で賑わう古平港、ローソク岩、丸山岬を眺め、石を投げたり大自然の中で遊んだ楽しさを思い出します。

今は文化の発達で、自然の中で遊ぶことのない子供達のことを思い、大自然の中で遊ばせてやりたいものだとつくづく思うのです。

町内の学校探訪

明和小学校

1

◇耕作が盛んになる

古平では鰊漁場が繁栄し多くの漁民が入って来たが、開墾した土地の多くは干場として利用され、周辺の畑地も自家用としての野菜類を栽培する程度で、販売するようなことはほとんどなかったようである。

明治五年頃から、鰊場に出稼ぎに来て鴨居木川やススキナイ川沿いに入植する人達がいて、立ち木を伐採し笹ぶきの掘立て小屋を建てて開墾を始めた。

明治一四年、青森からの入植者達が泥の木川下流を開墾し、廻り渕は当時サケの千石場所といわれていて、サケの漁獲をしながら開墾をする者もいた。

明治三〇年前後からヨシヤチやガローの沢の開墾も行なわれるようになり、古平川流域一帯の平野部に農業が盛んになってきた。

明治三二年の北海道の調書に、

「古平河畔の原野に農業を専業とするもの五、六〇戸あり、作物の主なものは大豆・とうもろこし・馬鈴薯・そば・あわ、その他大根・ねぎ・かぶの野菜類で、穀物の多くは自家用である。（略）」

当時は水稲を栽培しても結実を見ることがなかったが、高橋与太郎らが試作をし成功したことから、大正の中頃には一帯に水田が増え稲作が広まった。

明治二二年の記録には、この地区で農業を営む自作・小作・兼業の合計八四戸、人口二一四人（男一〇八人・女一〇六人）、耕地面積一六一町八反歩とある。

このような状況の中で、年々就学年令に達する子ども達も増え続けてきたことから、地域の人達が学校の建設に奔走するようになった。

これまでは数キロ離れた古平尋常高等小学校へ通学していたが、雨や風の日、特に冬期間の通学は困難であったことから、再三町にも陳情をしていた。

◇学校の建設へ

学校建設に向けて、佐藤吉助、中野和蔵、木村彦松、工藤富五郎、金沢金之助らが中心となって運動を始めた。

陳情を受けた岩淵三樹藏町長は、明治四三年六月の町会（町議会）で学校建設と旧学校移転のことを提案した。これは鴨居木に元沢江分教場の建物を移転し、特別教授所を設置するというものであった。

ここでの論議は、移転の費用は地域住民の労力奉仕や寄付によるものであること。教授所というのは分教場と異なり、設備などの費用が少なくてすむこと。収容する児童数は男女合わせて三五名であること。などで原案は可決された。

敷地は町有地である鴨居木学田地のうち千五百平方㍍余りを労力奉仕で地均をし、七月に移転工事を始め、九月二五日に竣功、開所式を行なった。

校舎は一二五平方㍍、工事費一六七円は部落住民の負担と、高野常吉外の寄付によるものであった。

◇鴨居木教授所の開所

学校は古平尋常高等小学校鴨居木特別教授所として開所し、一学年から四学年までの一学級の複式編成で、落合雄之烝訓導が主任を命じられ、九月二六日から授業を開始した。

落合訓導は児童の生活状況から、まず児童に衛生を重んじる習慣を養おうとバリカンなど散髪用具の寄付を得て、先生が男子の頭髪を刈り、女子には結髪の実習をすることを取り入れた。

就学児童は男子二二人、女子一四人の計三六人であった。

大正二年からは落合てうが代

↑鴨居木特別教授所開所式での記念撮影
写真向かって右から
中野和藏　米田岩吉書記
木村彦松　梅村丑太郎助役
小野田収入役　山本藤藏校長
佐藤吉助　落合雄之烝訓導
滑川第三郎訓導　工藤富五郎

用教員として、三、四学年の女子に裁縫を教えた。またその年に中野和藏外部落の四三人から、オルガン一台と唱歌集一冊が寄付になった。

学校が設置されたことから、部落の行事などもすべて学校を中心として行なわれるようになり、部落では校門近くに掲示場を設置した。

大正四年からは尋常科五、六学年も収容して授業することになった。翌五年には農業実習畑を持ち、金時豆を試作して一斗五升（二七リットル）を収穫した。

大正七年の就学児童は男子三六人、女子二九人の計六五人となり、開所九年でほぼ倍近い児童数を数えるようになった。

◇町会議員へ陳情書

大正八年、部落の有志から町会議員へ、鴨居木教授所を独立した小学校に変更して欲しいという陳情書が出された。

陳　情　書

当部落の鴨居木特別教授所は明治四十三年九月二十五日の創立で、以来星移り月変り明年をもってまさに十周年となる。回顧すれば、当時の児童は僅か三十余名に過ぎなかったが年ごとに増加し、今は七十名を数えるようになった。さらに人口もまた年々その数を増し、前途ますます発展の余地があると考えられる。したがって就学児童の数は今日の比ではなくなるだろう。聞けば群来小学校は児童数四十名ほどというが、すでに独立した尋常小学校であり、こちらは特別教授所である。義務教育の学校で名称が異なると、ややもすれば世間の人はその軽重を疑い、ひいては教育の普及を阻害するおそれがなしとはしない。大正六年三月に庁令第八十四号と第八十五号で初等教育制度を発布され、各地ではすでに尋常小学校に変更したところもあるのに、当教授所だけが変わっていないのは大変遺憾なことである。ついては来る十周年を機とし、大正九年度より独立した小学校に変更されるよう部落民一同の希望であるので、何分のご詮議あるよう一同を代表し陳情いたします。

大正八年十一月五日

佐藤　吉助　工藤富五郎
木村長之助　金沢金之助
上野善五郎　依田七五郎
斉藤　岩蔵

（読みやすいように多少修正し、適当に句読点をつけました）

←後ろの建物が開所した当時の鴨居木特別教授所、写真は増築のための排水溝工事を労力奉仕する部落民

陳情書は、「視学巡視の際にも独立校とするよう理事者に希望しており、特別教授所は交通不便の地に設置するもので、現在、鴨居木は不便の地ではない。」との説明があったが、「諸物価が平常に帰し、町経済に余裕の生ずるまで延期」というで次ぎのような答申となった。

「本町会で審議したが、町は緊急にすべき事業を控えているので、町経済に多少の余裕の出るまでこれを延期することに決定した」

〈続く〉

古平の禁忌

✤土地の言い伝え

その土地には昔話や民話、民謡、また諺(ことわざ)などがあって、その多くは口から口へと伝えられてきた。それらは土地の生活のしかたによってまとまりができ、代々語り継がれてきた。

それらの中には、昔は固く守られていたが、今では全く形が無くなってしまったものも多い。

そのようなことの聞き書きを、むかしの生活を考える上からいくつか紹介してみたい。

✤鰊場の禁忌

禁忌(きんき)というのは「それは忌むべきことだからやってはダメだ。」ということで、古平ではよく「縁起が悪い」という言い方をする。

漁場では「板子一枚下は地獄」という諺があるように、常に危険ととなり合わせの仕事であることや、漁には運がからむことから、昔は漁期中の禁忌が特に多かった。

古平に限ったことではないが、鰊漁が盛んであった地方では、

・漁期中に鉄砲を撃つことや、太鼓などの鳴り物は鳴らさない
・野火や火葬をしない
・刃物を海中に落さない

これらは、道南地方から鰊を追って北上して来た漁民達によって受け継がれたものであろう。

小樽附近の海岸を汽車が走ったとき、「鰊が逃げる」と言って漁民が反対したこともあった。

漁期に死者があっても火葬はしない。仮葬儀、仮埋葬をして、漁期が過ぎてから火葬をした。

神社や寺でも、漁期の前までは盛大に鐘や太鼓で大漁祈願をしていたのに、この期間だけは太鼓や鐘は遠慮した。

漁期中、特に嫌われたのはお産であった。

「漁家に産婦があると、産忌といって一週間は漁に出ないのを例とする。これは海神が穢れを忌むことを恐れているからである」『北海道漁業史稿』(明治二二年)

鰊漁場では神仏に豊漁を祈願する風習が強い。昔は旧郷社琴平神社があり、各地域、そして自分の敷地内にも屋敷神、家の中には神棚、倉庫にもお札をはる。

ほかにも多くの大漁祈願の行事が行われていたというのは、鰊漁がいかに好不漁の差が大きかったかを物語っている。

✤日常の禁忌

漁期中には次ぎのような禁忌もある。

・着物は左前に着てはいけない
・着物の袖をかぶってはいけない
・しつけ糸をとらない着物を着てはいけない
・帯は立て結びをしてはいけない
・飯を盛った茶碗に箸を立ててはいけない
・食べ物を箸渡ししてはいけない
・足と足をこすりあわせて足を洗ってはいけない
・手を洗ったあと手をふかないで、手ふりをしてはいけない
・屏風(びょうぶ)ごしに物をやり取りしてはいけない
・粉をはたく(製粉)とき、一回分だけはたいてはいけない
・知らせごとのあるとき、普段は二人で行ってはいけない

まあいろいろあるが、これらのことは葬送のときの習慣であり、逆に言えば葬式のときにはこうしなければならないのである。

昔、土葬が多かった頃、墓掘りが穴を掘り終わった後、汚れた足を洗うのに、決して手を使わずに足をこすり合わせて洗う習慣があったからであろう。

手についた水を振りかけるのは大変失礼なことだが、同時に「手ふり水をかけられると死ぬ」という言い伝えもあった。

しつけ糸をとらない着物を忌むのは、死装束の着物を縫うときの風習からきている。

粉をはたくというのは、死者に供える枕団子に理由がある。死者が出るとすぐに米をはたいて粉にし、取りあえず枕団子を作る分だけ急いでやる。それで一回分だけ作ることを嫌う。

ほかにも、実際に漁場での行動についての禁忌があるがあとの機会にしたい。

昭和43年(1968)

古平町の生活から

家庭電化～車社会が始まる！　これが39年前の家庭生活の実態です

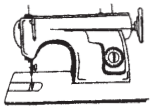
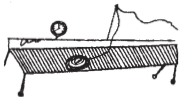
↓ トラック　130（15戸に1台）

乗用車　158（12）↑

↓ バイク　248（8）

自転車　1610（1）↑

↓ ミシン　1354（1.4）

毛糸編み機　819（2）↑

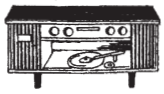
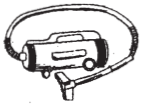
↓ 白黒テレビ　1842（1）

カラーテレビ　86（22）↑

↓カメラ　652（3）

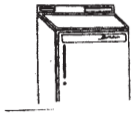
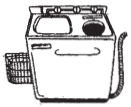
ラジオ　1026（2）↑

↓ ステレオ　286（7）

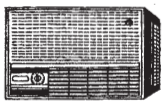
掃除機　640（3）↑

↓ 冷蔵庫　891（2）

洗濯機　1306（1.4）↑

↓ ルームクーラー　4

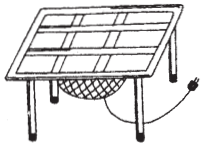


扇風機　179（10）↑

↓ ミキサー　130（15）

ガス湯沸器　84（22）↑

↓ 電気ごたつ　202（9）



昭和47年(1972)

↓ アイロン　1466（1.2）

電気釜　566（3）↑

↓ トースター　130（15）

〈古平町要覧〉

地方自治の移り変わり

―蝦夷地から北海道へ―

□町内に各種団体

明治が大正と改元したことから、東郷後志支庁長は改元記念勤労組合を各町村の小学校長指導のもとに設立させた。

校下の青年を組合員とし、戊申詔書※の趣旨を精神として、組合の勤労による益金を十カ年間蓄積し、協同の精神を養い、質素倹約を郷土の風習にし、青年と学校との関係を密接にするというのが目的であった。

※　戊申詔書＝干支（えと）でいう戊申（ぼしん）の年に当る明治四一年、日露戦争後の誤った個人主義的な考え方から快楽・官能を追うような世の中や、社会主義的な思想に走る傾向を戒めるために発布された詔書

大正二年にまず泥の木青年勤労組合が結成され、組合員一七名で組合長に上野善五郎、副組合長村上力が選出された。続いて古平・沖・群来青年勤労組合が設立され、組合員数は一〇九人となり、積立て金額も四四円七一銭余りとなったが、その後、事業の継続が困難となり、大正六年までにすべての青年勤労組合は解散した。

大正三年、思わぬことから第一次世界大戦が始まり、日本は連合軍に加わることになり、ドイツとの間に戦争が起こったことで物価は高騰した。大正二年には本道では今だかつてないほどの凶作となり、米、肥料（魚肥）などは極めて不安定な相場となった。

大正四年には紀元節を期して、交友会が結成され、会長高野常吉、副会長小町勝治が選出されたが、会員数や規約などは残されていない。ただ会員であった原田吉太郎は次ぎのように語っていた。

「町内に各勤労青年組合、平凡青年団などが結成され、盛んに活動していた。その後、政治への関心も次第に高まり、それに刺激されて壮年が呼応し、町発展振興のため一つの政治団体として発足した」

大正八年、斉藤兼太郎が政治に志を同じくする者に呼びかけ志同会を結成し、斉藤兼太郎が会長に選任された。

大正一〇年、この会を解消して新たに古平実業同志会を結成し、会長に斉藤兼太郎が引き続いて選任されたが、大正一五年の総会で大澤吉太郎が選任された。

□町政の転換期

大正五年は、町制施行以来始めての大きな人事異動があった。

町長岩淵三樹蔵が任期満了で退職、三上良知が五代目の町長に就任した。

先に助役梅村丑太郎が退職し、書記米田岩吉が助役に就任した。その後、収入役宮崎昇太郎が退職し、書記小野田豊作が収入役に就任した。一年間に三役全員の異動は今までになかったことで、さらに町会議員の半数改選や補欠選挙、大典記念事業として町立裁縫補習の開校などもあり、大きな転換期となった。

町役場の構成

給料	職名	氏名
五〇円	町長	三上良知
二八円	助役	米田岩吉
二七円	収入役	小野田豊作
二二円	書記	佐藤克己
二〇円	同	松岡秀雄
一八円	同	松座直治
一八円	同	高見勝太郎
一七円	同	北浜嘉雄
一五円	書記補	佐々木久太郎
一四円	同	竹浪政吉
一三円	同	佐々木量蔵
日給二五銭	給仕	保木春見
同　四五銭	使丁	斉藤金太郎

□在郷軍人分会

大正六年ロシア革命が起こり、本道の第七師団が満州の守備隊として派遣され、古平町出身の隊員は二六名であった。

翌年、英米からの提案に応じて、日本軍はシベリア沿海州にも出兵した。在郷軍人分会では出征した兵士に慰問袋の発送や徴兵検査など、兵事に関する行事が多くなってきた。

しかし、古平町は地形から街並みが東部と西部に大きく分かれて

いて、東部は商業・農業などの関係者の多い地区であり、西部は漁業関係者が多く、また出身地の違いなどもあり、住民感情として統一を欠くことが多かった。

在郷軍人分会も同じで、その成果が挙がらなかった。そこで兵事や射撃場の設置、招魂祭の執行、武術大会、大運動会、行軍、後志管内の行事などへ東西統一して参加し、会員の協調と融和を図ることに務めた。このようなことを通して事業の進展も見られるようになり、さらに一般住民へも及ぶようになった。

口古平町沿革誌の発行

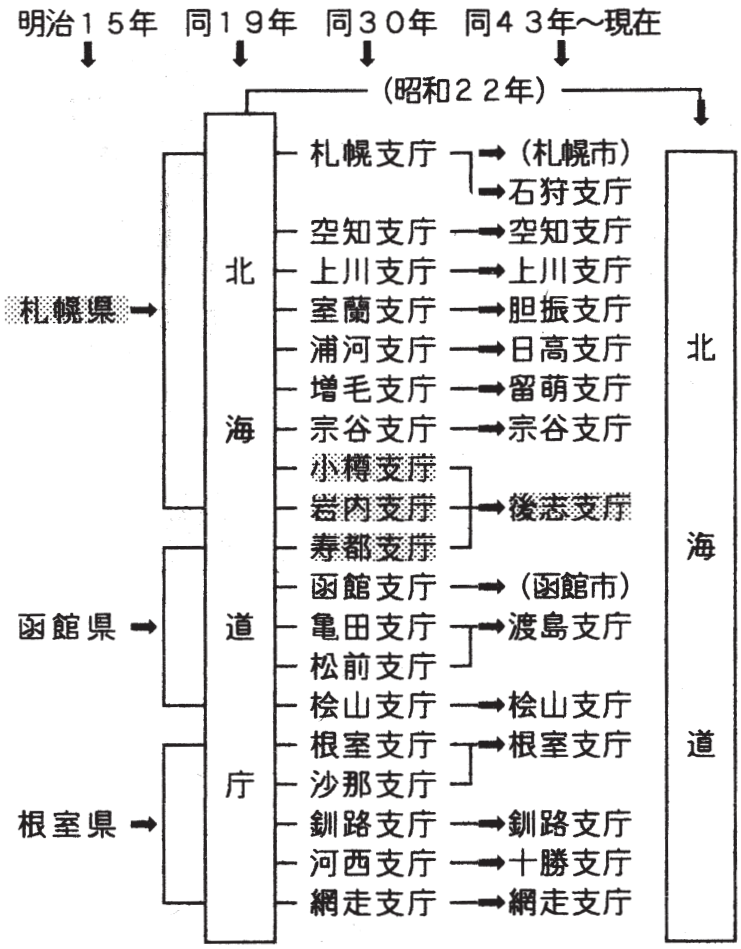
大正七年、古平町役場が『北海道後志国古平郡古平町沿革誌』を発刊した。

この沿革誌はＡ５判型、本文は二段組みで一七六ページ（各段ごとにページがついているので、実際のページ数は半分の八八ページ）、内容は一五章からなっている。図や写真は全く無いが、古平町の沿革誌としては初めて編集されたものであり、何部印刷されたかなどは分らないが、紙質もよくないこともあり、現在残っているのは古平町史編さん室で保管している一冊だけではないかと思われる。

以前のことを知るまとまった資料として価値があり、今では大変貴重なものとなっている。

～続く～

えぞ地から北海道→県から支庁へ



明治１５年以前の行政組織は省略
明治４３年３月、札幌県小樽支庁と岩内支庁・函館県寿都支庁が合併して現在の後志支庁となる。

郡役所を廃し１８支庁を置く ⇨
（明治３０年～４３年）
⇩ 開拓使のあと三県時代となる
（明治１５年～１９年）

古平と私（七）
取らぬ狸の皮算用

葛西庸三

古平へ異動が決まった時、
―今度は浜だから、二人で魚釣りをやって、一杯釣るべな。して、煮たり焼いたり、刺身にして腹一杯食うべ。
と息子に言った。
―いいね、いいね。魚を買わないば、お母さん助かるもね。やろう、やろう。
息子は相槌を打ち、はしゃいだ。側で聞いていた妻は、
―二人ともいいもんね。道具も持ってなくて、川釣りもしたことがないのに、夢みたいな話して。これこそ「取らぬ狸の皮算用」っていうヤツだね。
と声を立てて笑った。
私と息子は顔を見合わせ、いいからいいから、任せておけって、と胸をたたいた。
古平へ着任してから二、三か月余りは、毎日多忙で気持ちに余裕がなく、息子との約束の海釣りは頭の片隅にはあったのだが、そのままになっていた。
初夏が来て、息子にも友達ができ、わが家にも遊びに来る者ができた。その一人に釣りのことを聞いたら、いいよ、案内すっから、というのである。直ぐ頼んだ。
私と息子は新地の釣具店へ行って、初心者でも海釣りができる用具のお世話をお願した。
店主は親切に、サオの種類からリールの使い方、釣り糸からウキ・オモリ・ハリなどについて詳しく説明してくれた。
頭の中では大体理解できた気分になったので、思い切って私と息子の二人分の釣具一式を買った。エサも買った。
息子の友達と約束した日曜日が来た。
朝から青空が拡がり、初夏の太陽が早くから中空にあった。
妻は早くに起きて三人分のお握りを作り、おかずも用意して重箱に詰めた。お茶も水筒に三本を用意した。
まるで、家族揃って運動会か遠足に出かける朝の風景であった。
車に荷物を積み、息子の友達がいい場所だと言う赤灯台へ向かうことにした。
―お母さん、待ってなさいよ。一杯、釣ってくっからね。
息子は上機嫌で車の窓を開け手を振った。
―当てにしないで待ってるから。それより、海に落ちるんでないよ。
妻の声も明るかった。
赤灯台には直ぐ着いた。もう周りには何人もの釣り人がいた。
息子と友達は岸壁の直ぐ近くに糸を垂らし、私はリールを使って少し遠くへ糸を投げた。
しばらくすると、周りの人達のイトがぐいぐい引き、大物が次々とあがる。
二十分が経ち、三十分が経った。私のサオはびくともしない。息子と友達のサオも静かなものだ。
一時間近くが経った。元々短パラで待つことができない私は、だんだんイライラしてきた。さっぱり釣れないのがむかついて、とうとう我慢の緒が切れた。
―おい、帰るぞ。
私は怒鳴った。周りの人はびっくりした眼で私を見た。息子達はこそこそと帰り支度をした。家を出てからまだ二時間も経っていなかった。
ふてくされた顔で帰った私を見て、
―どしたのさ。こんなに早く帰ってきて。折角弁当持たせてやったのに、阿呆くさい。
と妻はぶつぶつ言って重箱を片付けた。
しばらくして気分が落ち着いた私は、心の中でこどもじみた無分別な行為を反省しながら、これこそ取らぬ狸の皮算用だったな、と赤面した。
息子の友達は、二度と私を釣りに誘ってはくれなかった。

しのび寄る魔の手 千手
とくとご注意を

富山市　高橋藤藏
（元・稲倉石鉱業所勤務）

詐欺のハガキに「無視」を決めこみ、第二の手段がやって来るのではないかと案じていたのだが、その後、何の音沙汰もなく過ぎ去った。

新聞やテレビが

「〇〇詐欺による被害」

「新たな振込詐欺」

「老人や一人暮らしに新たな手口」

等と報じ、被害にあわないようにとの喚起をしているが、まさか私にまで、魔の手が来ようとは想像もしていなかった。

思うに、私がもう少しボケていたら

「訴訟」

「裁判」

「敗訴」

「財産の差し押さえ」

「取り下げまで三日間」

との衝撃的な文面と、たたみかけるように追い討ちをかけてくるであろう彼らのワナに、マンマと引っかかっていたに違いない。

忘れかけていた数日後、新聞の社会面に大きな見出しで

「新手の架空請求詐欺」

「訴訟におわし、偽の弁護士紹介」

の実例が報道された。

新聞記事によると、詐欺の手口や文面は、私に来たハガキと同類で、七十才代の男性が「事実無根」の電話をしたところ、取り下げのための弁護士紹介をすすめられたという

この男性の相談を受けた消費者センターでは

「おそらく、偽の弁護士を紹介し、仲介料や取り下げの申請手続料を欺し取る、新たな手口と思われるので、無視し絶対に連絡を取らないこと。若し、電話をしてしまった場合には、お金を出す意志はないと、ハッキル断ること」

と注意を促していた。

このような詐欺行為は、新たな手口が次々と悪開発され、たやすく引っかかり易い老人を標的に、魔の手をのばしているらしい。

「おれ、おれ詐欺」の被害者の多くは、殆ど老人であり、とりわけ女が多く、公金の使い込みや交通事故を偽る「示談・もみ消し詐欺」は、公務員や教員の奥さんたちが被害を受けているという。

手口は

「即刻手を打たないと事件が明るみに出てしまい、主人の勤めや地位が危ない」

等と、相手を動揺させ、間髪を入れずに金を振り込ませているらしい。

くれぐれも、このような悪の手に乗ることなく、先ずは疑問の目で読み返し、覚えがあっても無くても消費者センターに相談し、対応の仕方を指導して頂くことが、彼らの魔の手と被害から逃れる最良の方法ではないでしょうか。

つい最近、私がターゲットされ、これに対応したいきさつを述べ、万が一の際の参考になればと思い、敢えて一筆いたしました。

（おわり）

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

橘　義春［遺稿］

八月十九日［晴］
武装解除となり下山
ソ連軍の捕虜となる

〈復員したときに船の中で、中島上等兵の戦死の確認状況を書面で復員局に提出した。しばらくして、厚生省から中島上等兵の実家に戦死の公報が入り、戦死の確認者が私になっていた。中島家でも寝耳に水の出来事で、ご両親の落胆ぶりも大変だったらしい。余市町の弟さんから手紙で、兄の戦死の詳しい状況を知らせてもらいたいとの依頼で、私も手紙で兵営内で親しい仲だったこと、戦闘の状況、戦死確認の場所、確認の決め手となったバンドのことなどを詳しく書いて送り、戦友との約束を果たすことができた〉

歩いて行くと、道の両側に日本兵の死体があちこちに転がっている。四中隊の兵隊か、速射砲（柿崎中隊）、歩兵砲（古山小隊）の兵隊か、生々しい激戦の跡がうかがわれる。側溝の深い水たまりに浸かり、体が丸々とふくれ上がっている遺体も何体か見える。この現状を遺族の人が見たらどんな思いがするだろうか。その遺族の方々の心情を思いやり、暗い気持ちで、足を引きずりながらただ黙々と歩いた。

中央軍道の両側は、見渡す限りピンクの益花が咲いていた。まるで戦争などなかったかのように。行けども行けどもこの盆花の花道が続く。そうだ、今日は八月十九日で北海道ではお盆なのだ。いつの間にか日にちも曜日も忘れていた。

途中の道路脇で、日本軍のトーチカが砲撃でメチャメチャに破壊されているのが見えた。トーチカなんか近代戦ではクソの役にも立たなかったのだ。

神無川の近くだった。日本軍のトラックが道路の脇に横倒しになり、いくつもの四斗樽に入ったご飯が散乱していた。おそらく最前線の私達に食べさせようと輜重隊が運んで来たところを、敵の待ち伏せ攻撃にでも遭ったものと思われる。さぞかし残念だったことであったろう。

激戦の地、古屯の近くまで来たら道路や側溝には、敵味方の小銃や砲の薬きょうがところ狭しとばかりに散乱していた。これは相当な量だ。また道路の側溝や草むらには戦死した友軍の遺体も多くを数えた。奥に入ったらもっと多いのではなかろうか。ほとんどが第一大隊の私達の戦友と思われる。収容して埋葬出来ないのが残念だ。可哀想で皆涙を流しながら心の中でその冥福を祈った。敗者の悲哀をしみじみと噛み締めながら歩き続けた。

遂に古屯の兵営に到着した。四日前までは私達がここを守備し戦ったところだが、今は捕虜としてまたやって来た古屯だ。焼けた兵舎や壊れた倉庫も目につく。時々銃声が聞こえる。停戦も知らずにまだ戦っている日本兵が相当いるらしい。連隊本部も休戦ラッパで呼びかけをしたが、彼らは最後まで投降を拒否して徹底抗戦し、自らの命を絶ったのだった。敗戦の悲劇はここにもあった。

古屯の兵営に着いた途端、ジャガイモ畑に四列縦隊に整列させられた。前の方の連中から、「身体検査をされるぞォ」ということがさっと流れて来た。皆大慌てだ。ほとんどの兵隊が自決用として手りゅう弾を隠し持っていたので、「それっ」とばかりに、畑の中に埋めることにした。ソ連兵の目を

かすめて前の者が軍靴で穴を掘ると、そしらぬ顔でその穴にポトリと手りゅう弾を落とし、さっと足で土をかけてしまう。何食わぬ顔をしながら入れ替わり手りゅう弾の始末をした。

私は手りゅう弾とソ連兵から奪ったナイフを持っていたが、皆が私を取り囲んでソ連兵から見えないようにしてくれたので

さっとしゃがんで素早く埋め一件落着となってホッと胸をなで下ろした。

身体検査の順番がきたので恐る恐る兵舎の中へ入って行ったら、いきなり一人の将校から日本語で、

「あなたは、ピストル持っていますか？」

と聞かれ、一瞬、意表をつかれてドキリとしたが、

「持っていません」

「時計はありますか。持っていたら外してここへ並べなさい。あなたの持っているもの全部出しなさい。早くしなさい」

急いで時計、万年筆、手帳、タバコなどを並べたら、次の部屋で待つようにと言われたが、戻ってきたのは雑嚢とタバコと鉛筆だけだった。時計も万年筆も手帳も没収されたようだ。悔しいが敗戦の身だ、仕方ないあきらめよう。

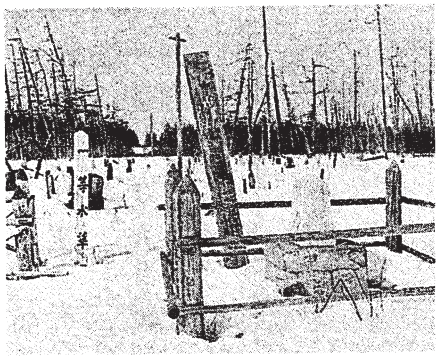
その内にまだ身体検査の終っていない連中に、「時計や万年筆は没収されるぞ」という話が伝わると、それぞれうまいところに隠して難を逃れた者もいたようだ。

久し振りに屋根のある兵舎に寝ることになった。夜になったら連隊副官の油谷大尉が回って来て、

「国境守備隊に御旗（軍旗）はありませんと、ソ連兵に聞かれたらこう答えてください」

と言って各部屋を回って行かれたが、軍旗は無事に豊原の師団司令部に到着できたのか、敵の重囲の中を行ったので難しいような気もする。部屋の者達の意見もそのようだった。

捕虜になったら殺されるのではないか、監獄にぶち込まれて刑罰を受けるのではないかなどと考えていたが、それはどうやら無さそうだ。今夜は安心して久し振りにぐっすり眠れそうだ。



刀折れ矢尽きた。栄光なき戦いは終わった。敗戦－これを冷酷な史実として受け止めなくてはならなかった。

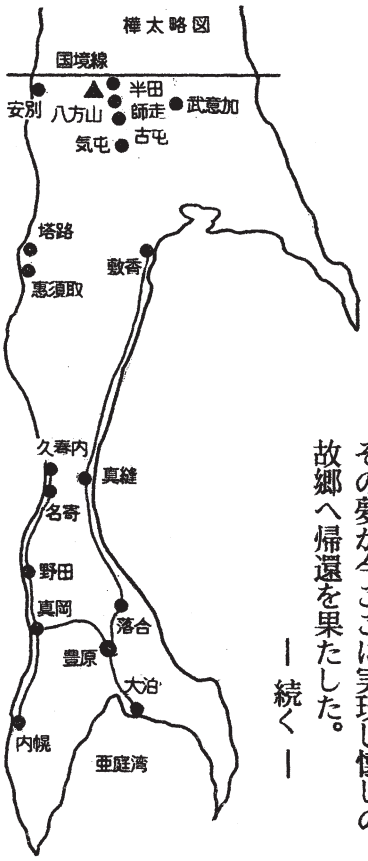
樺太国境守備隊員としての任務も、今日で終わり。これからは新たにソ連軍の屈辱的な軍事捕虜として、苦難の道を歩むことになった。

身はたとえ古屯の野辺に朽ちるとも君の功は敵も知りぬる

昭和二〇年八月古屯にて
連隊長小林与喜二大佐 詠

☆　☆　☆

極寒の北樺太で死ぬより辛い飢餓地獄と、言語を絶する過酷な重労働の中を戦友達に助けられ、励まされて生き抜いてきたが、天はいまだ我をを見捨てず！　一年四か月後の昭和二十一年十二月、樺太の真岡港より引揚船第二新興丸に乗船し、生きて再び故国の地を踏めるなんてことは、夢のまた夢だった。その夢が今ここに実現し懐しの故郷へ帰還を果たした。



―続く―

想い出の記

大澤文子

底冷えの続く小庭を、うっすらと白く染め淡雪の降り続く頃になると、きまってわが庭に番いの鵯（ひよどり）がやってくる。枯れ枝の間を愛らしく渡りあい餌を求める。あわてて私は林檎の皮をむき枯れ枝に挿す。鵯は啼きながらつつく。雀の餌なども好むので器に入れ枝に下げておく。番いの鵯がやって来ると毎年「冬が来るんだなァ」と、私は一人言をいう。幾組かの鵯の飛び来ることもあるが、その度に「また来てネェ」と、青空遠く飛びゆく鵯にささやき大きく手を振るわたしだった。

和やかな初冬の日々もなかくは続かない。昨夜から今朝にかけて雨戸を揺すり吹きくる嵐は止まず：。そんな時、今でも悲しく忘れることのない出来事とは：。ああ古平在住の頃の恐ろしい大時化のことであろう。

たしか昭和四十六年晩春の頃だったと思う。

その日は朝から何に狂うか、大荒れの天候は真夜にかけても止まず吹きつのる。轟き狂う大波は擁壁を強打しあっと言う間もなかった。わが古家の屋根の一部をはぎとり、荒海に飛ばしてしまったのだ。

大波はなおも海側の雨戸を割き、なだるる怒濤は「あっ」という間もなく六畳二間の畳の上をまるで生きものの如く、這うがに二部屋をのみこんでしまったのだ。驚きと寒さに流す涙もなく呆然と立ちつくす夫のあとにつき、ボ～ッとただ歩き廻るのみだった。

突然！　その時、大声をあげながらわれら家人を助（す）くると、馳けつけて下さった男性の方々、婦人会の方達、沢江町の方達。急をききつけこの真夜馳けつけて下さったのだ。ただただ涙を拭きもせず呆然と立ちつくすのみだった。男性の方達は大波の被害をうけた荷を積みあげ、その夜の寝場所をつくって下さったのだ。

「ありがとうございます」

ただそれだけのお礼も口の中で言い頭を下げるのみの私だった。真夜もすぎ帰ってゆかれる皆様を見送りその夜は寝もやらず夜は明けた。

不思議！　一夜明けた空はそのように晴れあがり静かな海面をごめのひと群が優雅に舞っていたのだ。

「えっ」驚きの眼を見はればわが家の前庭には大石、小石、貝がらがごろごろ。潮の引いたあとであろうか、白い条が幾条も残った。その驚き！　昨夜のつらかったことも忘れ、この珍しい現状にただただ目を見はるのみのわたしだった。

一夜明けた早々に再び逞しい男性の方達が多数馳けつけて下さったのだ。

すっぽり潮につかってしまった六畳二間の畳を海近くの砂浜まで担いでゆかれ、二畳づつてかけて火をつけて下さったのだ。畳燃す煙は低く磯になづさう中を、物珍しそうにごめのひと群れがつかず離れず舞っているさまは印象的だった。

また海面を遠く霧笛を鳴らし過ぎゆくは何の船か：。懐かしい想い出のひとつであろう。今でも私はその時期になると皆様に心から感謝し手を合わせる。

ふと原稿をかきながらおもったことではあるが：。

あの頃は簡単に砂浜にも降りることが出来たなァ：と。

その頃、わが地のむかいに「大林道路」のプレハブ住宅が高々と建ち、男性の方々、賄いの女性達とも新鮮な気持ちでおつきあいが出来たことを今でも懐かしく思う。時には海辺近くの砂浜で酒盛りがはじまり、真夜おそくまで歌声、手拍子がきこえ楽しかった。

もちろん！　わが夫も誘われ、いそいそと仲間に入り、楽しそうだった笑顔を今でも忘れることはない。

現在は『消波ブロック』が出来、昔の様に簡単に砂浜に降りることもないと言う。

なにか：移りゆく時代のさまを思いつつこの真夜ペンを措いた。

消えてゆく伝承 正月を祝う風習

□お正月

私達の生活を振りかえってみると、なんら意識することもなく古い生活習慣を受け継いでいて、逆にそうゆう中に心の安らぎをかんじていることが多い。

新しい生活を求めている都会でも、お正月になればおせち料理が並び、雑煮を食べ、着飾った人達が初詣で賑わう。

こうした多くの儀礼が失われていく反面、逆に盛大になっていくという風潮も見られる。

一月は正月ということで年中行事の最も多い月のようであるが、なぜこうし儀礼が行なわれるのか。「正月」についてあれこれ考えてみたい。

□一日のはじまり

大晦日十二時をまわると元日、「明けましておめでとう」となる。近代は時計を大事にする習慣から、一日の初めは十二時を過ぎたときとしているが、朝目覚めたときを一日の始りというのが、生活していての実感である。

昔は日没が一日のはじまりであった。その証拠に、現在ではアシタといえば翌日をさすが、元はアシタ＝朝のことで、ユウベといえば昨夜のことだが、ユウベ＝タで元は夜のことである。

こう考えると大晦日の夜（日没）から新年がはじまるわけである。だから大晦日の晩を「年取り」と言い、新年初めての食事なのでご馳走を食べて祝う。

□真冬なのに『迎春』

年賀状などの新年を祝う言葉に迎春というのがある。これから本格的な冬を迎えるのに迎春？とはちょっと気が早いようだが、これも昔、暦が採用される以前は春・夏二回の季節感しかなかったので、春の初めをもって年の初めとしていた。今の暦でいうと「立春」の時期だったので、新年の挨拶にも「謹賀新春」とか「迎春」という言葉を述べるのは日本人の生活習慣からきたのだろう。つまり、正月はすべての生き物が躍動する春を迎え、人々が新しい生命力がよみがえったことを喜び、祝うことに正月の『めでたさ』があったと思われる。

□正月は年に三回

時代が少し進んで、月を中心にした暦が使われていた時代、といっても、日本では明治五年までこの暦（旧暦）を使っていた。

正月というのはもともと農耕に深い関係があった。それで一年のはじまりとして正月の満月の夜、年神を迎えて旧年の豊作と無事平穏とを神に感謝し、あわせて今年の豊穣と平和を祈念する日であった。これが旧暦による正月十五日にあたる。

明治六年から現在の新しい暦（太陽暦）になったが、昔からのしきたりもまた引き継いだので、現在も一月十五日（今の暦ではこの日が必ずしも満月になるとは限らない）を「小正月」として祝う地方もある。

また唐（昔の中国）の暦から年の始めの日を元旦というようになった。元＝はじめ、旦＝日の出・朝の意味である。年・月・日の始めを三元といい、三元の日の最初の朝が元旦なのである。だから一月元旦？　はおかしい。

□いつまでが正月か

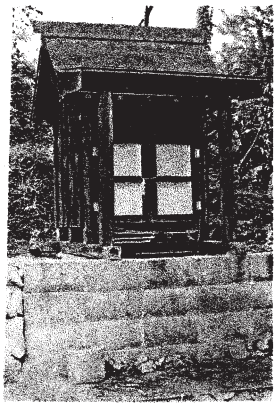
定まってはいないが、正月三が日とか松の内といわれるように、三日とか七日までとか考えるのが一般的である。

小正月（元日が大正月）の後は二十日が正月の終わりとされ、二十日正月として祝う地方もある。してみると、「正月」という名のつくのは地方によっては三回はあることになる。

戦後間もない頃には東北地方では三回お正月があった。古平には青森県辺りからの移住者が多かったので、その風習がかなり残っていたが現在はさすがにもうないでしょう。

□年　神（歳徳神）

正月に家に迎え祀る神様で歳徳神（としとくじん）などとも呼ばれる。この神様は稲作農耕の神様としてまつられる。稲を豊かに実らせてくれる田の神（農神）であり、床の間に米俵を据えて、年神の祭壇とするところもある。しかし年神という性格は複雑で、一般には年頭に当って、家々の繁栄をもたらす神様だと漠然と考えられている。



←鴨居木小野寺巳代治さんの畑に建っている屋敷神

年神はいったいどこから来るのだろうか？　運勢などで「恵方」（えほう・明きの方）というのがあるが、これが年神の来る方向で、一年を通じて縁起の良い方角とされている。

歳徳神というのは平安時代に中国から伝わって来た『陰陽道』でいわれたことに始まる。暦にも記されるようになり、暦の普及と共に一般化した。二、三年前にテレビや映画で宣伝された『陰陽道』というのは物語りなので、これとは関係ないようである。

□道具の年取り

年取りをするのはなにも人間だけではなく、ふだん使っている道具にも正月を迎えさせ、「女の正月・女の年取り」などとも呼ぶところがある。

小正月の行事として行なわれるところが多く、日用品から商売用の主な道具に注連飾り（しめかざり）をする。

漁村では船がその代表であり、早々に大正月には船倉・網倉などに注連飾りをするが、本州方面では二日に船霊（ふなだま）を祀り船祝いをする。

□仕事始め

年の初めに、実際の仕事に先だって儀礼的に仕事を行なうことで、お正月のテレビで放映される、振袖姿の女性が仕事をしている風景などは、さしあたりこの仕事初めに当るのかもしれない。

農業では、北海道など雪の多いところではできないが、農家では田畑を少し耕して、田打ち正月と呼んでいる。

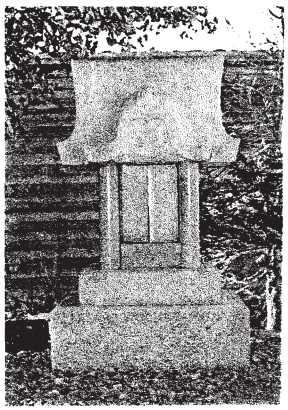
山では初山・山入りなどと呼ばれ、山に行って適当な木を山の神に見立てて、それに酒や餅などを供えて枝を切って来る。これは全国的に行われているという。

□山の神

稲作神としての山の神は農民が祀る山の神で、春に山から里に下って田の神となり、秋に収穫が終ると再び山に帰って山の神となるといわれている。山の神と田の神は同一だと考えられている。

山中を支配する山の神の多くは、山に祠（ほこら）を作って祀られているが、樹木や石にも宿るという信仰がある。ことに樹木ではYの字型や三つ又になっているような特徴のある木を「山の神の木」などと言って神聖なものとしている。

おもしろいのは漁業神として山の神を祀っていることである。なぜ山の神が漁業神なのかわからない。日本は地形として山が海辺まで迫っているところがあり、魚付林や木材は船の材料となるので、船の守護神と考えられたりしているともいう。



←入船町㋑山口さんの住宅前に建っている屋敷神

山の神の姿は、神道では（おおやまつみのかみ）とか木花咲耶姫（このはなさくやひめ）といわれているが、古平高校と道路を挟んだ反対側に、大山祇神と書かれた二・五メートルほどの石碑が建っている。

山は自然の恵みと同時に危険なこともいっぱいある。それで山仕事をする人達は山の神への信仰心も厚く、本州の山村では講をつくって山の神を祀っているところもある。

年ごとに我に立ち還る雪の童話あふれて長がき冬が始まる

歳末を静かに過ごさむ願ひをばゆさぶりやまぬ年の寄せ浪

限りある命思へりしみじみと土に還らむ落葉ふみつつ

紅葉を落ちつくしたる冬木立の中に色なす七竈の朱実

こわいなきことにも涙出て来てわが晩年を如何に待つべき

冬が始まる

瀧内優子

この日頃忘れてをりしことなき口に紅ひく鏡にむかふ

心まで素早く見透しゐむ鏡わが分身のごとくに磨く

突然に外光暗みかきくらむ雷鳴とどろく予報の嵐

間髪を入れず轟く雷の音雷鳴つねに迅速にして

茶柱の立ちし茶碗をいとしみて良きことあれと口にふふねぬ

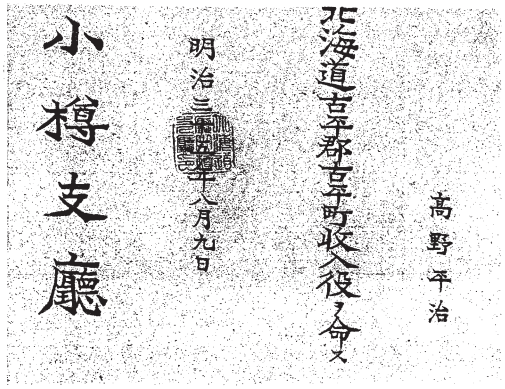
小樽支庁時代の任命書

明治の新政府がようやくでき、新しい北海道の行政は大きな問題でしたが、その仕組みはまさにネコの目が変わるように目まぐるしいものがありました。

それまでの開拓使が廃止されると、明治一五年、今までの事業を継続する事業局と札幌・函館・根室の三県（13ページの地図参照）の時代になりました。しかし、この区分はどう考えても適当ではなかったようで、これも僅か五年で明治一九年、北海道庁が設置されると郡役所が置かれるようになり、明治三〇年、支庁制度に改められると古平は小樽支庁の管轄になりました。

明治三五年、北海道だけの町村制によって古平は二級町村となりました（明治四〇年一級町村）。二級町村になると町村長は道庁長官が任命し、任期は四年です。役場吏員の定数も長官が定めていました。

二級町村になると収入役が置けますが、町会（町議会）で推薦された収入役は支庁長の承認を得て任命される仕組みです。任期は町村長と同じ四年です。また役場吏員の任免も支庁長の権限でした。



小樽支庁は明治四三年の次ぎの支庁の改正まで続きましたが、小樽支庁の名前の入った文書はあまり残っておりません。

小樽は当時人口が函館に次いで道内第二の町でしたから、札幌・函館と共に区制がしかれ、小樽区（高島郡ほか）として独立していました。

古平町岬短歌会

虎杖の枯茎立ちし間より細く光りて崖落つる滝　池田テル

逝きし母の日々の言葉も教訓と思へば良しと笑顔になりぬ　金子寿子

秋深し山間の紅葉赤々と流れに映る景色美し　坂本信子

「これはこれで又良いものね」など言ひて枯れ色の峠をゆくバスの旅　鈴木時子

久々に旅の市場を見て廻はるやはり気になる漬物の売場　田中香苗

雪来ると家うちに入れしくちなしの蕾ほころび香立つ夕べ　丹後初江

部落の畑に熊の足跡ありしとふ回覧板来る秋深まりて　東美知

から松の木々の黄葉枝共に揺れをり風にもて遊ばれて　堀典子

古平俳句会

積丹の海荒るるとも鱈の旬　斉藤波留

山茶花や逆縁なげく人のあり　山口悦子

公園の散策飽かず冬紅葉　越野敏雄

忘るるといふ事学び秋高し　大和田絵伊

参道は落葉舞い込み音のなく　高橋重子

変り行く川の流れに秋惜しむ　仲谷比呂古

夕暮れの茜の空を雁渡る　外山俊久

木枯のかすかな日差しさらひ行く　渡辺嘉之

冬空をくすぐるポプラ並木かな　堀典子

鰤の跳ぶ積丹沖の上り潮　本間寿昭

尖る波光る波あり秋高し　越野清治

編集雑記

▽二〇年来愛用してきた時代がかった？　電卓が、0を示したままピクリとも動かなくなってしまった。いつも手許にあって何気なく使っているが、いざ故障となると不便この上ない。ちょっとした計算でもまごついてしまう。日本人は以前は計算が得意と言われてきたが、近頃は学校で「マス計算」などということが行なわれ、大人の間でもアタマの運動とかではやっているそうだ。最近、インドがＩＴ（情報技術）産業で世界への進出が目覚しいが、その元は数学にあるという。そしてそれを支えているのが日本でいう「九九」で、日本では９・９＝８１！で終るが、インドでは１９×１９まで暗記させられるとのこと。小学生なら苦もなく覚えてしまうかもしれない。もっとも日本にも算盤（そろばん）というすぐれものはあるが。「九九」は中国から伝わってきたが、中国では日本とは逆で９×９から始まるという。

もとはインドのゲームで日本へ渡って来たのが将棋で、西洋へ渡ったものがチェスである。何しろ世界文明発祥の地ですからねえ。

▽お正月になるとおめでたいものとして、今も昔も「七福神」が登場してくる。神様なのか仏様なのかよく分らないが、昔から「福の神」として民間信仰の代表でもある。お正月の縁起物として飾られたり、いい初夢を見たいと枕の下に入れて寝る人もいたというが、さすがにいまどきはそんな人はいないでしょう。

ところでこの「七福神」だが、国籍を見ると日本出身の神様は「恵比寿」さんだけで、あとは皆外国出身の神さまである。着物からはみ出した大きなお腹のユーモラスな布袋さんは、中国の実在したお坊さんで、日本では神仏混交がごく自然に行なわれてきたことがよくわかる。

「恵比寿」さんは釣り竿を持ち、鯛を抱えた姿の神様で、漁業・農業・商業などへのご利益を持つとされている。古平町内では最も多くまつられている神様である。近頃はクリスマスの行事が盛んになり、古来のお正月の伝統行事がすっかり影をひそめてしまったのは残念だが、お正月のお年玉は、子ども達にとっては期待するものが大きいかもしれない。

▽次号で予定している後志管内町村合併の流れを調べていたら、町村の大字・字名で「本町」という町名がやたら目につく。試しに郵便番号簿を開いてみたらなるほど多い。「ほ」のつく町名には本町が、道東の方だと幌（ほろ・ぽろ）が多い。そういえばある人が言ってた。「市町村で本町と銀座の地名の無いところは珍しい」と。古平にもありますネ。

ある本に「アメリカで一番多い地名はワシントン」とあった。なんでも郡名・市町村名で三〇〇、通りの名前を入れると軽く一〇〇〇か所を超えるというからこれは驚き。だがこの程度はまだ序の口で、橋やダムなど、また国境を越えてアフリカでも盛んに使われ、研究者の話しだと、なんでも全世界で五千はあろうとのこと。アメリカ合衆国初代大統領ジョージ・ワシントンは、大変な人気ぶりと言うしかない。

謹賀新年

平成十九年元旦

古平町史編さん室

総務課長・室長　成田昭彦

嘱託　村井芳男

古平町史編さん室　を閉鎖します

すでにご承知のことかと思いますが本年度（来年三月）で古平町史編さん室が閉鎖されることになりました。

町内の皆様からはいろいろとご支援やご協力を頂き、相当数の貴重な文書類やその他資料を収集することができました。文書類は一部未整理のものもありますが、十分な保管と管理の下で将来の再開に備えたいと考えております。

現在発行している『せたかむい』につきましては、今後の発行を検討中です。

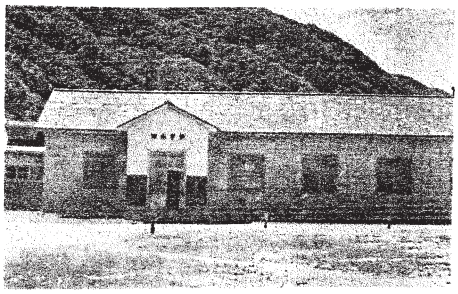
古平町史年表

昭和28年（1953）　～続き

▲中央バス㈱で賃上げ要求のストライキが行われ、バスが運休する（6/24～7/3妥結する）
▲古平観光協会設立総会が開かれる。会長に高橋民蔵が選出される
▲古平観光協会が丸山頂上に展望台を作る計画をたて役員が下検分をしたが、国有地のため実現しなかった
▲石狩湾底曳漁業禁止区域拡大について、当局からの提案に対しての回答書を提出する
▲北後志消防大会が中島グランドで行われる
★沖小学校校舎竣工式が行われる。基礎工事は校下の住民の勤労奉仕によるものであった
★港町の海岸護岸工事が着工される（150㍍）
▲古平高等学校創立5周年記念式、祝賀会が行われる
▲新地町登記所隣の引き揚げ住宅から出火して1棟2戸を全焼する
▲古平剣道同好会が結成される。会長に高野常雄が選出される

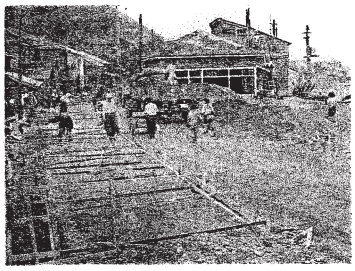
昭和29年（1954）

▲古平町消防後援会を結成。会長に蓮実豊光が選出される
★刺網で鰊大漁、約4,000石（3,000㌧）の漁獲があったが、翌30年以降は後志沿岸での漁獲は皆無となる
▲伊藤由松が無競争で町長に三選される
▲古平町・入舸村・余別村の町村合併促進懇談会が開かれる
★港町恵比寿橋が竣功し、渡橋式が行われる
▲東京大相撲横綱東富士一行が、勧進元桐沢定吉により古平小学校校庭で興行する
★古平町警察署の廃庁式が行われる（町警が廃止される）
▲北海道古平警察署開庁式が行われる（道警となる）
▲古平小学校新地分校校舎の梁が外れて危険になり、6学級240人の全児童を本校に収容する（6～8月）
▲バス料金は定期船の2倍ほどだったが、いつも超満員の盛況でバスが増発されていた
▲中央バス㈱が余市～美国間に大型バスを導入する



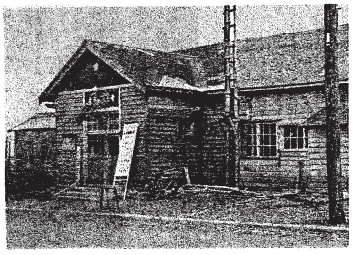
⬆ 沖小学校が新築落成する

⬆ 町内で最初の鉄筋コンクリート製恵美寿橋渡橋式



➡護岸工事に続いて道路舗装工事

➡刺網大漁一家総出で船の巻上げ



➡古平町警時代の庁舎